

「差別しない」図書館の存在意義



川上 珠実

「どなたでも歓迎」。インドの首都ニューデリーの住宅街にある図書館の掲示板には、そんな張り紙が張ってある。「すべて

のカースト、階級、宗教、ジェンダーと性自認、障害を持つ人々を歓迎します」と張り紙の記述は続く。

ここは、カーストによる差別に反対する市民団体「コミュニティ図書館プロジェクト」が運営する図書館だ。利用者が思い思いに本を読んだり、スタッフが幼い子どもに読み聞かせをしたりする風景は、日本の図書館と変わらない。しかし、冒頭の張り紙が必要なのは、インドの身分制度「カースト」外の最下層に位置付けられる「ダリット(不可触民)」が読書の機会を奪われてきた歴史があるからだ。

自身もダリットの貧困家庭出身である図書館スタッフ、バーブナさん(40)は「私は都会であるニューデリーで育ちましたが、家には電気も水道もありませんでした」と振り返る。貧しさから両親は教育を受けられず、読み書きもできなかった。

バーブナさんは、家族の中で何とか学校に通うこ

とができた初めての世代だ。教育を受けて気付いたのは、「読むことは考えること」ということだった。なぜ、自分たちは貧しいのだろう。なぜ地域の催しに招かれないのだろう——。大学に進学してカーストやジェンダーなどについての本を読み、これまでに自分が経験してきた日常的な困難の背景に社会の差別があることを知った。

「さまざまな葛藤が頭の中になりましたが、私たちには表現する言葉がなかったのです。読書は考える力をくれました」とバーブナさんは力を込める。

インドの識字率は1950年代には2割弱だった。その後は上昇し、2001年には約6割、11年には約7割になった。しかし、バーブナさんによると、インドでは無料で利用できる公共の図書館が少なく、ダリットを含む多くの貧困層にとって読書の機会は今も限られているという。

この図書館内では、私語が禁止されていない。図書館に慣れていない人々も、萎縮せずに利用できるようにとの配慮だ。友人同士で並んでおしゃべりしながら、一つの本をのぞき込む少年たちの姿もあった。「より多くの人々が読書と出会えますように」。バーブナさんはそう願っている。